

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	住居類型における組成事実からみた現代住宅作品
Title(English)	Contemporary Residential Architecture on "Constituent Facts" in House Typology
著者(和文)	佐々木啓
Author(English)	Kei Sasaki
出典(和文)	学位:博士(工学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:乙第4181号, 授与年月日:2021年3月31日, 学位の種別:論文博士, 審査員:塚本 由晴,安田 幸一,奥山 信一,藤井 晴行,山崎 鯛介
Citation(English)	Degree:Doctor (Engineering), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:乙第4181号, Conferred date:2021/3/31, Degree Type:Thesis doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

論文審査の要旨及び審査員

(2000字程度)

報告番号	乙 第 号	学位申請者	佐々木 啓	
	氏 名	職 名	氏 名	職 名
論文審査員	主査 塚本 由晴	教授	山崎 鯛介	教授
	安田 幸一	教授		
	奥山 信一	教授		
	藤井 晴行	教授		

本論文は、「住居類型における組成事実からみた現代住宅作品」と題し、以下の7章から構成されている。

第1章「序論」では、まず建築史家 S. ギーディオンが歴史の中で繰り返される傾向と定義した組成事実を、異なる背景のもと時代や場所を超えて建てられてきた住居類型である町家型、ヴィラ型、納屋型、それぞれにおいて整理し、これをもとに、建築家によって設計された住宅作品の形式を検討する本研究の意義、および組成事実の多様な実践として現代住宅作品の展開を明らかにするという本研究の方法、および概要について述べている。また、関連する既往研究や建築論と照らした本論文の独自性について述べている。

第2章「奥行の分節と統合による町家型住宅作品」では、隣家に挟まれて間口が限られた高密度な都市部に特有の細長い敷地において、庭や吹抜等の垂直要素と採光可能面の配置により、通風や採光が確保されるとともに空間的な奥行が必然的に形成されることを町家型の組成事実として整理し、これをもとに建築家が設計した世界各地の町家型住宅作品ならびに各地に伝わる伝統的な事例の構成形式を捉え、比較検討することを通して、奥行方向の空間の分節数の違いに現れる、町家型住宅作品の展開を明らかにしている。

第3章「視線と動線の貫通による日本の町家型住宅作品」では、日本建築の特徴である建具の開閉による室の変性が、町家型においては奥行方向への視線および動線の貫通を成立させることを組成事実として整理し、これをもとに日本の町家型住宅作品および伝統的な事例の構成形式を検討し、伝統的な事例におけるトオリニワによる単独貫通とミセノマやダイドコといった複数の室と敷居による連結貫通を参照しながら、室および敷居の種類、街路から敷地奥に至る貫通の範囲の違いによる構成形式のパターンを、敷地の細分化や自動車の普及といった現代的な条件と照らし合わせることで、日本の町家型住宅作品の展開を明らかにしている。

第4章「正方形平面を用いたヴィラ型住宅作品」では、四辺が互いに等しいという正方形の特異性によって、軒の形状や窓の配列が四立面どうしで比較され、ヴォリューム形状や壁の配列が軸や中心を基準に測定されることをヴィラ型の組成事実として整理し、これをもとに周囲が開けた敷地において正方形

平面を用いたヴィラ型住宅作品の構成形式を、屋根形状、窓の配列、壁の配列の各パタンの組み合わせから抽出するとともに、その多様性をヴィラ型の原型ともいえる A パツラーディオによるヴィラ・ロトンドと比較することで、四辺および四軸どうしの関係の重なりによるヴィラ型住宅作品の展開を明らかにしている。

第5章「単一架構の反復による納屋型住宅作品」では、単一の屋根架構を一軸状に反復させた、天に接する覆いと地に接する床によって規定される原型性が、居住のために複数の室へと分割されることを納屋型の組成事実として整理し、これをもとに納屋型住宅作品の構成形式を、架構の反復を条件づける外形プロポーションと屋根架構に対する室の分割から抽出するとともに、各地の伝統的な事例に対する同様の検討との比較により、原型性を備えた屋根と居住のための室分割の拮抗にもとづく納屋型住宅作品の展開を明らかにしている。

第6章「現代住宅作品に展開された住居類型の組成事実」では、第2章から第5章で明らかになった、町家型、ヴィラ型、納屋型の組成事実から捉えた住宅作品の構成形式を総覧し、住居類型の現代的な展開可能性を論じている。さらに日常の暮らしを支える住居類型における組成事実だけでなく、都市における建物の集中・反復における建築的な規範の形成にも組成事実が見出されることを、現代日本の住商混在地域の角地建築物を例に論じている。

第7章「結論」では、第2章から第6章までで得られた結果を総括し、本論文の結びとしている。

以上を要するに、本論文は、設計者の有名性の有無によってこれまで別々に論じられてきた、地域や時代を超えて建てられてきた住居類型と、現代の建築家の設計による住宅作品の構成形式を、各類型に固有の組成事実を媒介に、共通の枠組みで比較検討する方法を確立するとともに、住宅作品の現代的な実践のなかに成立する伝統の更新という位相を示しており、建築意匠論の発展に資するものである。従って本論文の成果は、工学上および建築学に貢献するところが大きく、博士（工学）の学位論文として十分に価値のあるものと認められる。